

わがむらの昔ばなし

夏越祭の茅輪くぐり



市自治会の人による茅輪づくり

茅輪くぐりは七月(旧六月)三十一日の夏越祭に茅輪をくぐり抜け、穢を払い災厄をまぬがれ、心身の清浄ならんことを祈請する祭で輪越祭、管貫神事とも言う。

当日早朝、露のおりた大きくて長い立派な茅を数束刈り取り、本竹を割りそれを芯にして直径三米余りの丸い輪を作り、それにひと握り半ぐらいの大きさに茅でつつみなが

ら括って行く。茅を集めることもさることながら茅輪づくりは仲々難しく三、四人でも数時間はかかる。

出来上ると向拝(拝殿前)の大きい二本の柱に丸くなるようにとりつけて注連縄を張ると茅輪づくりは終わる。

この由来は古く飛鳥時代、文武天皇の大宝神祇令(七〇一)にはじまり、平安時代の醍醐天皇の延喜式(九二七)に「六月と十二月との晦日に京都の正面の朱雀門前で、親王、諸王、諸臣、百官の人等の代表者を集め、その人等が過ち犯したかもしれない雑々の罪を、天皇の仰せによって抜い清めさせること。」とある。

この平安時代以降では、麻の葉、茅、夏草も抜いをするときの執り物とされた。又この時代以降は六月の大抜のみが名越抜の名で盛んに行われるようになった。

茅輪の起源については積日本紀の巻七(鎌倉時代中期)

に備後風土記逸文を引用して「神代の昔、武塔神(素戔鳴尊)が南海の方へおいでになる途中、或る所でお泊りにならうとして土民の蘇民将来、

巨旦将来と言ふ兄弟に宿を求められた。その時、弟の巨旦将来は裕福な身であったにもかかわらず宿を拒んだのに対し、兄の蘇民将来は貧しい身であったが、尊をお泊めし、粟柄を以て座を設け粟飯を饗して御待遇申し上げた。その後、年を経て、尊は再び蘇民

将来の家を訪れ「若し天下に悪疫が流行した際には、ちがやを以て輪を作りこれを腰に著けてをれば免れるであらう」と教へ給ふた。この故事に基づき「蘇民将来」と書いてこれを門口に張れば災厄を免れるという信仰が生じ、また抜の神事に茅輪を作つてこれをくぐり越えるようになった。」要するに茅輪も最初各自が腰につける程の小さいものであったが時代を経るにつれ大きくなり今日のように茅輪く

ぐりに備後風土記逸文を引用して「神代の昔、武塔神(素戔鳴尊)が南海の方へおいでになる途中、或る所でお泊りにならうとして土民の蘇民将来、巨旦将来と言ふ兄弟に宿を求められた。その時、弟の巨旦将来は裕福な身であったにもかかわらず宿を拒んだのに対し、兄の蘇民将来は貧しい身であったが、尊をお泊めし、粟柄を以て座を設け粟飯を饗して御待遇申し上げた。その後、年を経て、尊は再び蘇民

町民文芸

短歌

三隅短歌会

六月作品

伊藤シズエ
藪陰に仄かに白き野いばらの咲きあて香る風なき昼を

岡 松子
かすかなる風に声なく降りかかる杉の花粉の粒やわらかき

佐々木ヤチヨ
夕まぐれ庭におり立ち仰ぎみる空に月光淡く潤める

立間 雅子
ちち色の朝もやふかくしすまれ草生を一人わが歩みをり

田中 朝子
兄のあと「フアイトフアイト」と妹が追いつつ走る朝のひとつとき

久行 コト
堤防の草刈り居りて黄しようぶの一群咲けるを刈り残すなり

平川 育子
しめ出され淋しかりしか犬の仔はまつわりつきて立ちて踊りぬ

古屋 博子
ポプラ木の耀う若葉仰ぎつ、生きたる希望の湧きてきにけり

堀 光太郎
梅雨嵐に打倒されし白百合のほのかな香りによりゆくわれは

吉村 恵子
夕やみに浮き立ち咲けるどくだみの四弁の白き花のめにしむ

安藤 芳江
鼓うつはりある声にさそわれて

謡ひ明した夜もありしかな

石村 栄助

さやかなる初夏の朝明を賑はしくかわら小雀口笛を吹く

伊藤 一郎

抜きにける奥歯が痕に小悪魔の棲みて夜な夜な酒に誘ふ

白井 麻子

一瞬に山肌おおい上りくる霧におぼれて山上に立つ

平川 喜敬

鳳凰山を越え去りがてに白雲の峯つたいゆく霧のすがしき

俳句

清風句会

六月定例

岡 松月
四時起きも習いとなりし明け易く

池田 久子

麩屋の厨跡らし蛇走る

高崎はま子

短夜にハマナスの旅明け易し

上田 雪子

しむほどに効めあらたかまむし酒

齊藤 元

山峡の水すみりけり蛇渡る

因藤 兔史

鱧箱見まわる頃や明け易し

宮垣 萬女

老ひ行きてふるさと想ふ明け易し

大深 八重

綺蛇やくの字くの字と川走り

藤木 常

短夜や般若心経唱えたり

沖村美智子

蛇くねるみてより乳房堅くなり